

伊藤整「幽鬼の街」と小樽の地図

講師 亀井志乃(市立小樽文学館 館長)

〔伊藤整プロフィール〕

明治38年(1905)1月17日、北海道松前郡に生まれる。翌年、家族と共に忍路郡塩谷村(現・小樽市塩谷)に移住。

大正6年(1917)、庁立小樽中学校(現・小樽潮陵高校)に入学。大正11年、17歳で小樽高等商業学校(現・小樽商大)に進学。大正14年に小樽市中学校(現・長橋中学校)教諭となり、在職中に詩集『雪明りの路』を刊行。昭和3年(1928)、23歳で上京。当初は詩人を目指すが、まもなく文芸批評の道に入り、海外の文芸理論を翻訳・紹介するうちに、自らも小説を執筆するようになった。

代表作「イカルス失墜」「幽鬼の街」「得能五郎の生活と意見」等多数。晩年は、近代日本の文学の歴史と意義を問う大著「日本文壇史」に死の直前まで取り組んだ。
昭和44年(1969)11月15日死去、64歳。

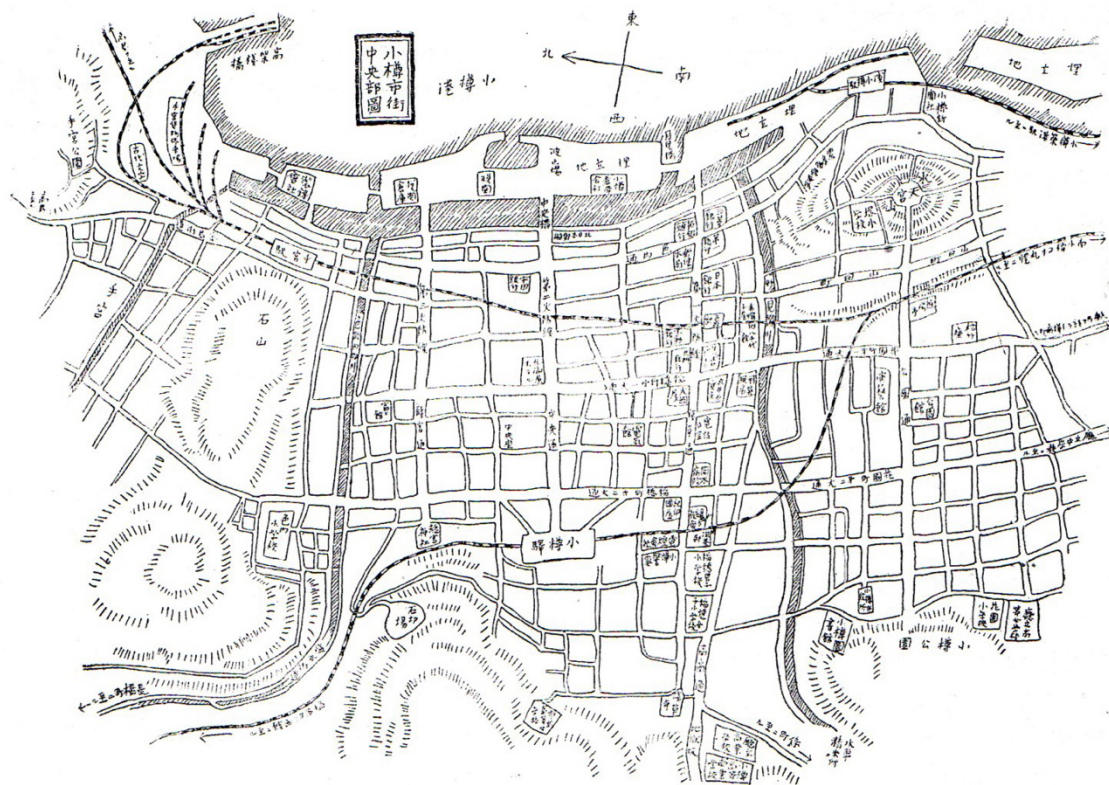
「幽鬼の街」

初出 『文藝』昭和12(1937)年8月

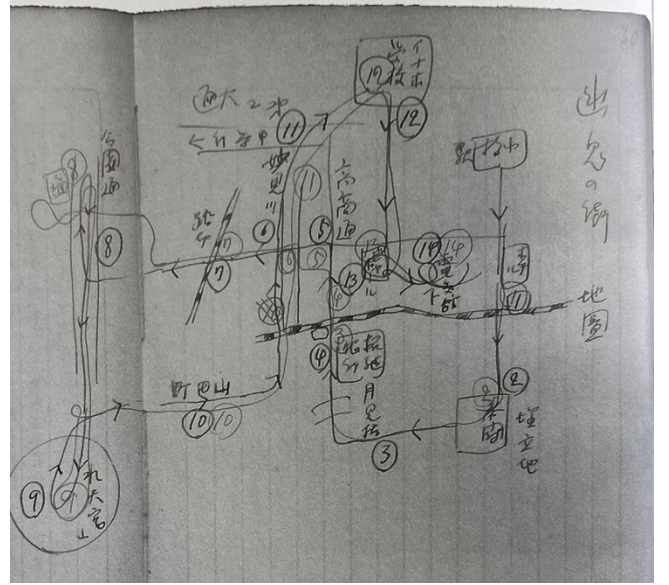
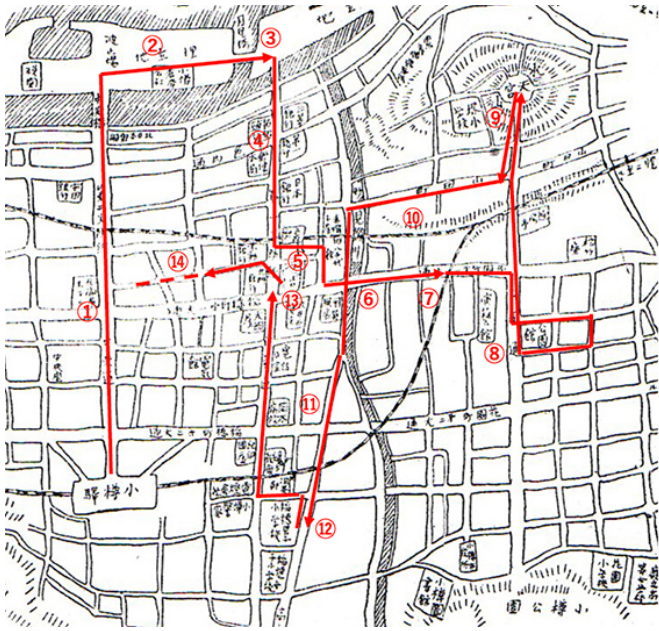
【冒頭】

膚寒く曇つた日であつた。私は小樽駅前の広い坂道を真直海の方に向つて下つて行つた。道の向端には赤い船腹をでくと突き出した北洋通いの貨物船がものうげに幾隻も浮かんでゐた。(中略)街の両側には、北海道名産アイヌのアツシ、熊の彫物、小樽市名所八景、手宮の古代文字とその因縁、樺太案内記、北千島漁場詳解、などの土産ものを売る店があり、ペニ、丸正、角一などの大きな文字を硝子戸に書き記した旅館が並んでゐる。(中略)

私は幾年も住みなれたこの街を歩いて、いま別に何の感興もこれらの風物に対して湧くわけではない。この街にはなにか私の心を和らげる空気がある。私はあまり長い間これ等の電柱、港の景色、宿屋の二階の張出し窓などに見なれてゐるので、私は歩きながら自分が殆ど眼ざめてゐる気がしないほどである。



左・『文藝』掲載「幽鬼の街」初出形に挿入された
伊藤整手書きの小樽地図



構想メモの経路を
 伊藤整手書き地図に
 落とし込んだもの
 ただし、
 構想メモは上が山側、
 手書き地図は上が海側

「幽鬼の街 地図」
 構想メモ
 伊藤整の
 創作ノートから



上右・①の北海道拓殖銀行
 上左・③の月見橋
 下・④の北海道拓殖銀行
 (右手前の建物)



上・⑤⑥

小樽市中心街の賑わい 昭和11年

下右・⑧の公園館

下左・参考 公園館通り



上・⑬のビヤホオル
 下・参考 浅草通り
 ⑬のビヤホオルは
 通りの右側
 (電柱の陰)



私(※伊藤ひとし)は市場の雑踏の中からまた公園館の前へ出て行つた。すでに夕暮に近く、映写がはじまつてゐるのであらう。入口の正面にある白く塗られた映写室から、ちかちかする白い光が洩れてゐた。(中略)私はつかつかと切符売場の窓口に歩みより、そこに先刻から肘をついて中をのぞいてゐた男を押しつけて切符を買はうとした。

(中略・中をのぞいていた男との問答)

——君もう東京へ帰へるつもりかね?」とその男は親しい無雑作な口を利いた。

——ええ、もうここも厭になつたので、帰らうと思ふのですが」

——失礼だが、君は郷里は何処かね?」

——え? 郷里? 郷里は北海道ですよ」(中略)

——ふむ、さうですか北海道ですか? ところでこれは余談ですが、アイヌといふのは毛が縮れてゐるのですか?」

——さうですね、男は縮れてゐるやうですね。」

——なるほど。ではやつぱり人種がちがふですね。(中略)毛唐の縮れてゐる髪の毛をとつてすな、いやあなたのをやうに大和民族でありながら、アマメント・ウエーヴをかけてゐる人は別ですよ、本当の縮れた毛を切断してみるとその切り口は必ず楕円形になつてをる。(中略)」

——さうですか。しかし僕は別に、アマメント・ウエーヴをかけたわけでは無いので、生れつき縮れてゐるのですがね」

(中略・男は切符を買つて立ち去り、伊藤も切符を買おうとする)

——上野までの三等寝台券をくれませんか」

中には金ボタンのついた紺の詰襟服の駅員がゐて、私の方は見もせず、棚のあたりに手を伸ばしたまま、向ふを見て言ふのであつた。

——売り切れですよ。寝台券は一枚もないのですがねえ。」

私はだがどうしたのか執拗にをれを求めたい慾求に駆られた。この街がもう怖しくなつて来たのである。(中略)

——しかし僕は是非欲しいのですがね。僕にだけ売らないといふ訳はないでせう。僕にも売つて下さい。僕はどうしても欲しいのですがね。」

(中略・駅員は伊藤に切符を売ってくれず、代わりに切符売場の奥に連れていく)

私のすぐ上、それから二代三代前と、漢字で名前が書かれてあつた。処が五列目あたりでその系図の線はぐつと長い線が横の方に引っぱられて、そこからは先は五字か六字の片仮名の名前ばかりがずつと上の方まで続いてゐるのであつた。

見るとそれは、シリモヌイ、イサラツペ、フゴツペ、カムイシユツペなどといふアイヌ名であつた。私は窓口に置いてある自分の握り拳がぐくぐくと震へ動くのを感じた。これだつた、これだつたのだ。私の周章狼狽なんかは見たくもないといふやうに、駅員は相かはらず私には眼もくれないのであつた。(中略)

——あ、解つたです。それなら宜しい」と私は言はうとした。だが言葉が口から出なかつた。(中略)

私は何と名状しようもなく離れにくい窓口から自分を引き剥がすやうにして離れた。かういふ恩恵的な侮辱を受けた後で、人間はその恩恵者を殺さずにはゐられないものだらうか、と私は思つた。もしも今後街上であの駅員に逢つたらば、私は地面にでもめり込むより外にどうしようもないであらうと思つた。

この苦い味、それをかみしめながら、私は窓口からまた人混みの中に入つてゆき、特有の曖昧な顔つきになつた。このとらへ所ない、どの感情にも属さぬながら、そのままの感情のなかへでも入つてゆける私の顔つきは、空白のなかに跪くやうな自棄の心と常に結びついてゐるものなのだ。今また私はそこに突き当たつたのだ。

すでに夕暮に近かつた。公園通りの両側に出る夜店商人の群が台を並べて支度をはじめてゐた。

☆……………さて、伊藤ひとしは何処にいたのですしよ?..



上右・明治36年6月開業
小樽中央停車場(現・小樽駅)
上左・明治44年7月竣工
中央小樽駅(現・小樽駅)

下・昭和9年12月竣工
現在の小樽駅
駅舎としては3代目
道内最古の
鉄骨鉄筋コンクリート駅舎



北海道大博覧会
(小樽市単独開催)
昭和12年7月7日
〜8月25日

右・上空から見た会場
手前が公園会場
左上が海岸会場
左・空から見た
海岸会場全景

